特56
328

校正
新刻
麓草分
鈴木正三老人著
上

019815−001−3

特56−328

麓草分

鈴木　正三／著

上

M23. 3

ABG−0637

特56
328
Wè19361
23

特56
328
We1936/23

大法牧家

東京教育大学

麁草分上

一 剃髮受戒時可著忍事

一 可敬禮三寶事

一 守義可修行事

一 行脚有功德事

一 可守一言一句事

一 允食有得失事

一学文有得失事

一可観無常事

一以願力可修行事

一可守捨身事

剃髪受戒時可著心事

一佛道修行は近く人に学ぶと深く入麁

と分て頂上に登る。修行未熟

向上は至事かゝり。意と得処は

所要は先方に相応する仏道とする

所。それ剃髪受戒の時より心とに

なて知づる相あり。此方は不浄穢悪の

方なり。悪業煩悩の方なり。愚癡暗

冥の身なり。三悪四趣は隨るべき方

内閣文庫
昭和五年
帝国図書館蔵

り。四苦八苦に責らるべき身なり。たゞ
るゝ仏仏祖祖出世在く。雖行苦行の
功よりも。種々方便とき。様々教化を
施垂ひて。濁世末代の我ホに至ま
て。救とり給ん願力有難事なり。
る。今日髪を剃衣鉢をうけてより。
人倫人父母九族の上に在し。仏道祖
道を学得し。孫より修行成就して仏祖
の恵命を續。永く三界を出離せんと。
生々世々の本懐此時なりと思ひ定く。

隨喜の思ひをなして先名利の二つ
を離べし。名とは八万代に名を残し誉
をわゝいさん事也。利とは財寶を求
て栄花と窮らるゝ人間一生八名利の
二つに使て片時も安事なくして日夜
と苦むのみ。此念に引きて地獄餓
鬼畜生修羅の四悪趣に堕して八寒八
熱の苦を受飢餓羸瘦互相殘害の怨を
うけ出期更なし。嗟今仏才子
となるゝ喜の中に悦何事か知之

小心成佛得脫まべしと大誓願を發て佛祖を守べし。心誠なくハ髮剃する
ちゝ。鬼畜にゝ有べゝ。況ん
佛弟子と成て。鬼畜乃ゆゝるべき事
天罰佛罰免るべゝ。冨光是と免さん
や。忍ても行忍べし。三界を出て出
家乃二字を始ゝ名を探るゆゝれ
人分受ゝ。況佛弟子と成事ハ
育恩の浮木に不昊。此度は分を救ゞ
して。又何ぞ乃生を初まべきやと一

筋より行ひ定て信心堅固にゝ。佛乃
供物より進べし。若事ゆゝて其を
始ゝん人ハ。出家して益あるべゝ。出
離乃願力をゆゝて供行せゞん。出家乃
名を得ゝゝ。其後ハ佛法商人なるべし

可敬三寶事

一夫三寶ゝゝハ。佛寶法寶僧寶也。是を
三寶とあゞめ奉。是ハ三種乃義あり。同
体三寶。別体三寶。住持三寶也。同体三寶
と云ハ。其知覺性と佛寶と名付。真如

よ執持の義有と法寶と名付。真如り和合の義有と僧寶と名付。又別体三寶と云よ二宗あり。一つよハ丈六の金身と佛寶と云。四諦十二因縁生空の教を法寶と云。四果縁覚と僧寶と次。二つよハ大乗に説三身の如来ハ是佛寶也。二乗の教ハ色法寶なり。三賢十聖ハ是僧寶也。又未世住持三寶あり。木にきざミ絵よあらハハ形像と佛寶なり。三巻文句と法寶と。剃髪深衣同一理事と僧寶

と也。云ハ未世濁乱の時よ至て佛弟子佛恩と。忘佛意と。忘佛意と云ハ次信仰なくさ時ハ三寶の威光隠て。万民無明の闇よ迷。信心堅固にして。世来の教を守時ハ。三寶の光あり。つ生て國土明あり。万々と抛て一心をくげ。ますべ。これハ堂塔よ糸宿せんよハ。家を出るより心をもつめて信心を發とべき意得あり。佛々祖祖の出世あり。未世の衆生悪鬼畜よかゝり有べ。ぼ。よのあり。諸佛の出

世にいきとしるべし。我宿業拙くして、
雖然今人間に生れ来て、仏菩薩を尊ぶ
事、或は形を絵像木像にあらわし、堂塔
伽藍に安置せむる。称を奉ずるもむ
べけんなり。されども、ただ恭敬して、仏の在世
の御ありさまを、身命を抛て礼を
尊ぶ。身命を抛ずして、信力たくい、功
徳あるべしや。況和光の跡、垂迹又仏図を立
置給事、六生済度の方便也。結縁の
利益あるべしや。況や無道の

我ホトケを不知。仏陀神明をも不敬。何
ぞ加護を仰ぐ。三宝を礼する時、信
心を発べき文句有。今此三事皆是我有。
其中六生悉是吾子。此文を会得して仏恩
を報ずべし。未世の我ホトケをもまでお
もれをもて、かくのごとくふ
わるべしや。釈尊の御一人のみ。何の
仏にて、ありんや。抛じて礼を知
ぬ中に、無量の得益あり。恩を知バ信ん

有。信心則清淨乃仏なり。信ハ是道の
本功徳乃母と云てなり。信なくして乃と
得事あるべからざるなり。乃たくして心乃安さ
るもあるべからざるなり。去道乃仏なりと煩悩を
くり日我心とたやすく思ふ。為ふ仏道修行の人如
なりなり。拙ふ仏是仏也。何乃仏と
よ淺智乃人ハ即仏是仏也。仏ハ是の邪見多しされば
う教いんと云。如是
即心是仏乃教ハ。しかるを偽未や。唯
是仏祖乃教なり。法花言語ハ皆教なる

人ハ徒なりといふんや。家に愚癡乃道
世去有て云。我ハ唯今道有智識と者
なり。木像ハ唯木也。絵像ハ筆の跡也。文
よ者なり。云て仏像と不用我見
と者なり。石彼道世去よ向ていく。
唯今道去と者ハ元なり。されども其如
識更化の後。或ハ木像よりなり。或ハ絵
小なりて立亜なり。皆木成して欲
却よべきなり。さて不義を極の人
なりなりで。ひしせつまりて心と

さ。それ仏像と程くする人の即心是佛の語を用ひも僻る也。須ハ言教仏像隔なく。一筋に生力の如来と会得して信心を發し。身命を投て敬礼し自己の功徳を勤むべー

守義可修行事

一佛道修行する人。必ず義を守べー。義なくして修もの成就なべからず。義とは有て万事にわたりぬきハ出家ハ元生済度の形力として。出離解脱のあふ修もするい義なり。欲心と本として誉を願ひ。知識の位と云。寺を住持せん志をいく。修学するハ不義也。生死の大事を守ハ義なり。生死を忘て世間に着次ろハ不義なり。定禅工夫をするとするい義也。懈怠不信なるハ不義也。勇猛精進の心をもて修するハ義なり。怯弱にして退屈を生ずるハ不義なり。禁戒を守て威儀正しさハ義なり。破戒無慚なるハ不義なり。話頭公案を提撕ー

て。大慈悲と云ふ。義也。慮知分別の心
と云ふ。解會に渉て云ふとも不義
なり。經陀羅尼と誦して。佛に奉ると雖
霊と弔ふ義なり。佛と不信亡魂と不
救ふ不義也。身と忘て人と惠ふ義なり。
力と恩人と忘ふ不義なり。佛神に
請て。一大事因縁を祈ふ義也。公用
利養を祈ふ不義也。幻化云事の理と
守ふ義なり。有相に着する不義なり。
慚愧の心有て修行する義なり。云

慚愧するは不義なり。人の命を扶
けるは我分を捨る義なり。我分
を扶るを恩と云。人を捨るは不義也。臨
危不変不動傳ふ義也。心を変じて動
搖するは不義なり。父母師長派此義
なりと雖敬ふ義なり。我が理を立て
恩に背ふ不義也。此外限なしと云ふ。
此旨を以て考ふべし。

行脚有功徳事

一諸方行脚とは。嶮難の道を通る。方心

と責業障と畫の徳あり。躰羸きと法会の。色躰安樂なる時は種々の会増長と。会よりて三界火宅の煩悩来る。会滅とれば自己清淨なり。清淨なれば佛心に近しれど罔々と先ぐり。山と越浦とつゝき。大河小河と渡り。山と清め。霊佛霊社に参詣して信心と發し。霊性清淨の氣をうけく。自己清淨とする。山水草木林石に向ても。彼が清淨の氣をうけて自己

と清め。善惡の人に觸て。自己の心と汚れやすけ。自他の差別なき理と知り心を住処なく。萬境に着せずして。一生は唯浮世の旅成事を觀じて。樹下岩石あはれやすみて仏祖をまも。捨身の仏と守て。書清淨の氣をうつすべき修行なり。眼を着て行脚せで。氣の熟するに随て。信心堅固なりて。常住工夫をなすべし。如此相應せで。途中則禪定と成て。一切善

悪さとりなく。ユ丈の中に万事をる
して。間断をるるありべく候。懈怠の
心をいく。空くの脚をる候るるれ。
行脚ハ須具行脚眼と云ふり
可守一言一句事
一聽一言一句領會もれば萬言萬句を知
るり。大梅ハ即心即佛の一句を聞て大
休歇の田地をいたり。六祖ハ慧能所住而
生其心の文を聞て契悟をまるり。
何也の言句よりてもへく緣有語句

て大疑團を起して守らんよハ。多言
更ら論なり。長者の人多智と差次
もなく有べく候。傳て聞学て知る。誠
の智ふ。元来自己ら本智ふり。
唯自己の長明を明むべし。文字言句
ハ。自己をくまする異云なり。心頭ら一
物を着ざるハ佛ゆり。頭ハ佛法世
法一切を放下して。一句の本意ら達
すべし。是万法の源也。此本源ら通徹
する事ハ。信心堅固ならるべ。佛祖

乃教授なり。經文字言句達者なり
情識を盡して功徳を成べし。況
や出離生死をおもうてをや。誠の心たくい。
何なる行業も皆徳なり。当信心
堅固なりて。一句と守る人。經見性の旨
をとを。情識の妄想自性より消滅し
て。方心大安楽成べし。達磨大師も理
入行入の二つを立て給へり。行入何ぞ空
るべきや。若又一句の靈圓破きて仏眼
大よ開かるよおもうて。生死長夜の苦

あて。一物なきさ安養の淨土。極楽世
界よいたるべし。さ外何なるを学得せ
ずや。信取せよ〳〵

毛食有得失事

一佛祖毛食を行じ給へり。十二頭陀の
行力なり。次第に毛食宣毛食と用へり。
此行身心を責着相乃念を離さ所也
乃慳貪を破つと。衆の者と利益し一
言乃徳を施し功徳を積て。清淨去
得の心よりたんあり。悪く言得

て元食せじ。備は餓鬼の業成べし。法
ど元食の用心と能知べし。明朝元食
に出しなはるよい。宵よりも強く誓願
を發とべし。明日は在を所々ヶ門
門は高く孫を結び。家々の亡靈を求
ひ。慳貪邪見の者は。功徳をあつめべ
し。佛祖の恩を報ぜんる。衣生濟度
ふもくいるの。衣生濟度もの事は。
身命を法界ふ抛の外は有べからざと。
なりひ定て牙一拾角の心を守べし。

牙二意慳の心を起とべし。牙三如義
幻泡影の偈を守べし。此三正しかるべ
して。衣生は功徳を授る事うるひがさ
ち。三界の万靈三途八難の苦患は賢べ
しと願力をもの。寺を出るよりは心は
相意の經呪を讀誦し。心を強く持ち
牙歯をうと合。眼をとを座禪の心地を
能用得て慳貪邪意慳の家備る。貪
家をあてきと。一切衣生の苦患をなひ
やうる位下賤平等の心をいてそうう

くと歩りして。順逆乃縁強び得く。
立寧所乃亡靈無孫語云〻りと親会
しめぐりおくりて向るさよい。清水の
色よくちよりも。法もり無量生滅
法乃理よ任しあるひい殺鍼鬼或を
経咒と讀誦し心の及やど弔て。放
下して向るべし。家よ向りても無池
新常経陀羅尼と誦して。萬靈と弔
べし。托鉢乃偈よ云財法二施功徳無量。
擅波羅蜜。具足圓満

学文有得失事

一学文をする人よ。三種の義あり。一よい仏祖
語録を見時に文句に眼と着て走り
言を受る人有。縱ば三界無安猶如火宅
乃文を見時に。我更よ火宅を不知。結
句火宅を不知して言ひて思入く是
を見。又如夢幻泡影の文よ向て。如露亦
如電に思入く是を見。文句毎如此眼を
着て守る人あり。乙ハ則書よ向て座禅
工夫をして。寸有の会を責る人あり。二

よゝ廣学多聞を好く。經文語録に心を。
そゝるのみ沢山法門聞とゝのへこゝ何ぞ乃
經如何成録に如此の理あり。此外別の事
なし。我佛祖乃言ふとゝまりとゝまりて。意得
て如此人よりも授るゝと。本意しゝとる人あり。
此人に有為乃法とゝ。ゝるゝ事かゝゝ。三
ゝ者智者のゝとゝ。てんとゝ牛言と
して教多乃聖教諸録と沙汰して名
聞に住し慢心とゝゝ。無智乃人とゝ牛
め。我に顔をる人あり。此人の学文

部てあゝ成世人の僧をうけ人のま
ゝとりも味わてて自他に為もつまり。
世に立事を自ゝ沢。我一人二人を賊
めゝ。聞法者ゝ世よ。あまりひろまり
て萬人我をゝ牛むる事。全くまねる
べゝ沢学ぶる所乃智恵何のをあゝを
や。佛祖乃言教を見る事。我慢乃幢と
折。自己の地をあゝめ。無我無人と成て
一切衆生をあゝ。功徳をあゝ。ゝめんあ
り。猶に和合僧とゝ。六乃和合のゝバ

僧よりあるべし。一よハ分和合して其住
し。二よハ語和合して無諍。三よハ意和合
して無違。四よハ戒和合して同修し。五よハ
見和合して同解し。六よハ利和合して同
均とぞ。りの理とを人知らずして淺さ
なりと臭にわげ。也人我と爲し我慢
わりて我慢とをと人と智者とせん
や。唯是佛祖乃至ささり。法と知りの
ハ。忍とをり。世人人眼わり慚愧乃心
なきハ出家よわるべ。慎ても摘怠むべ
し。佛祖乃本言ハ唯離相離名なり

可観無常事

一夫菩提心とハ云ハ。無常を観ずる心なり
といへり。釋尊因地乃時修行。雪山童子
といし時道とをる。法の虐にて。
諸行無常是生滅法と唱ふ。
文肝よ銘じ尋入て見給へ。瘦衰して
鬼神わり。今の文ハ汝昌へとやと宣へ
で。鬼神他也と云。童子宣ひ此文の末
あるべし。弟くハ聴聞せん。鬼神云暖な

鬼人の肉とあゝ弘ひて。唱べし。童子宣まく。幸我もらゝる肉分とあゝべし。偈文を唱へよ。鬼神則生滅々已寂滅為樂とゝゝ。鬼也。童子峯に登路の名ゝる毘婆沙石よ。諸行無常是生滅法生滅々已寂滅為樂と書付給ふ。諸行無常の文を埋み苔。是生滅法の文と洗ふ水。求世尊生成佛の縁とゝるべし。誓て。苔に下つゝ彼鬼神よ向て。ゝる所ゝゝと身をなげ給へ。忽に中ゝゝと赤白の蓮華生ず。

童子と敬掌上奉げ。是い真の鬼神よわゝど天帝釋の化現なり。童子の修行おゝゝ。必一切衆生を済渡ら給へべしとてうせ給ふなり。法行無常の真理言よ宣まくあゝゝ。院よ雪山童子の命よかゝゝ来世よ弥陀ゝ給ふ。味ふべさふあゝば。雪山童子衆生済渡の志。心肝よ銘ぜざるべきや。此四句の文を聞て。悦喜。涙ゝゝん。疎成ひなり。佛乃修行の人い。偏よ諸行無常と観ずべ。

光陰更にくるまつべし。時人と待るるもの。四時の遷変。花花葉の色目の前より分明なり。時々に生死の到来とる事を知べし。念々去常也。年月は移る山水の流るゝに異なるべき事なし。朝に見らるゝ花も夕べ風に誘はれて。顔有も夕べに白骨となる。昨日見し人今日いなし。南陽は哭し北里は悲して。人とゝるゝ洞不書。山下にそい原上に添て。骨を埋土乾く時なく。北邙の煙立や

む陳なり。親よりとれるゝと失ひ。夫と先ふ立く書に離二度逢なくして。愁嘆の洞に咽竈と断有括。見聞に心痛まざるんや。有情しる心情しる。誰か是を無常の鏡也。誠に有為の物変。眼にさえぎらとゝども。迷倒の我お是を見ば。奪精の猛鬼責来とも不平。齢既衰て。起居苦く。死期既に近しゝ。常住の念休時なく。偏に世路を行に念強して。三途の業目くに堪長せり。驚くべし怨べし。

光陰更にとゞまらず。時人を待つもの。四時の遷変。花花葉の色目の前より分明なり。時々に生死の到来とる事を知べし。今々を常也。年月は移るゆ山水の流るゝに異なり。沢此分は水の泡なり。朝露の顔有も夕べをいはず。白骨となる。昨日見し人今日なし。南陽は哭し北里は悲て。人となるは洞不書盡。山下にそい原上に添て。骨を埋土乾く時なく。北邙の煙立や

むなしの。親よりとれ子を失ひ。夫を先ふ立く書に離二度逢なくして。愁嘆の洞より咽竈を断。有相見所は心痛まざるんや。有情しる心情しる。誠は有為の悲哀眼はさゝぐる常の鏡也。誠は有為の悲哀眼はさゝぐるとゝども。迷倒の我は是を見ず。奪精の猛鬼責来とも不平。齢既衰て。乾居若く。死期既に近しゝ常住の念休時なく。偏に世路を行ゆ念強して三途の業目くに強長せり。驚くべし怨べし。

なげくべき力にあらざれば。日数をかぞへて限あり。電光朝露のごとくなるべし。倶に悔たる甲斐有べからず。忽死去時無常の思わんや。万事へ皆悲なり。

偏に諸行無常と悟るべし

願力可修行事

一夫逐倒の流生死海に落入く。生死に流浪する事車のめぐるが如し。諸仏依祖出世有て。是とあれども。大悲大慈のんと以て。速に成仏の道と教へ給へり。

しかるに。三界輪廻の我ら更に信力なくして。

是とも。仏道修行に怠

といへども。着相の合不盡して空く

有漏の癡福と。出離の縁なる

事なり。動バ畜馬家想の叢に入て。

ゆくべき路をしらず心猿名利の梢に

うろうして離脱事なり。依茲上菩提

と余所に見て出離解脱の願力なく。

利益慈悲ともなる不恩。冥の照覧をも忘

れ。解脱の大法をも渡世の業とす。

有相犯着乃会よ住し。我、仏才子ゆり
と行て。自己乃徳益のこゝ沢。
剃萬人乃心よ違ツて却て嘲と侍。他
人と引て悪道よ入るこゝ事。為くゝ知
バ有べゝ沢。出家乃二字と稼事。主御主
愧乃至ゆり。一論よ主始論田乃業とま
ぬれんと行ひ定て大誓願と発し。
菩提乃心と行べし。生死と出離とる
ハ。住願力にゝるべし。増賀聖と云人
は幼少ゝゝと道心深して。天台山根本中
堂乃薬師よ。千年通年して道心と行。
其後伊勢大神宮よ詣て祈ゝ。
神明夢中ハ謂宣に。道心と発さんと
らゞ。身と行ゝるのゝ。
是と聞て先名利と捨べして。衣裂
脱捨元食ゝにゝて。赤躾して路々ゝ
食して。四日と云よ山小登。慈恵僧正
乃室よ入ゝよ。狂人ゝゝてゝ。師
匠乃僧正のいさめとも聞ゝ。走出
て大和国多武乃峯に籠居して。一生

とおもひ給ふこと
人ハ。煩悩乃心と学て。佛道修行せん
を出離乃道と思らんよハなどか感恐
なりべき。不信懈怠乃軍何よりも
てか成佛せんや。専精力強して。志を
もつて真實と発し。義と正しく守
べし。先志と云ハ菩提と催本也。真實
と云ハ菩提心乃決定なり。義と云ハ
煩悩を截断もつの剣也。此三つハ。なを
乃三足の如く一つもかけてハ道を成就
もつ事かたし。譬ハ菓乃花さきて後
實しなり。熟して味あり。菓なり
毒なし。初中後三つの相應也。佛乃
修行もつる人も。三つ乃お意なりて出
離もつる。発心。志有て真實うもつる
人も有。真實なりて義乃よりさんもわ
ひ。故に成佛乃人稀なり。されて志菩
提乃花なり。真實ハ菩提乃實なり。義ハ
菩提乃味なり。熟して時ハ萬病を治を
乃大薬なり。惣じて志真實と云ハ萬

事に渡れり。藝能を古の上とす。志誠
實なるべし。君臣父子夫婦
兄弟朋友の交ふを志と真實なるべ
人倫なるべし。雖然義なるべし正理
を行ふべき事なり。それ愚闇の凡夫
を。愚癡迷妄より真實強くして少なり
ふ恨なり。理なるべき事に眞なるべ
より正理と不平。妄惡の心より引き出て
冥さとなる冥さふへて胸をやき。一念
執迷て犯人となり。あるひは自害を

あるひは寃霊鬼神となり。或は大蛇となり
邪まで念力強し。真外にまま惡
念をあつはあり。又惡人は惡行より真
實有て人をそこなひ破。万人の
わざとなりて。專苦患をいく。大地獄
と化り堅て。永さ住家となり。皆是
好所の真實の業力目前より有。如此
愚癡より強さ十が一を菩提よすむ事
實あるべ。何ぞ人の佛果よりべんん
や。それぞ道と修せん人は先邪正を知べ。

陋分真實有て修行するんも。あるひハ
悪と捨て善をとり。或ハ凡夫を嫌て佛を
求。あるひハ拾系浄土の快系より著し。或ハ
経文経説を当わらし。或ハ奇特神変を
当びぬ。孤より有漏心盡ずして。空く輪廻
の業をつのりて。色を成佛道と思へり。
拾る間夢幻泡影の文にをるて。ハ間ハ不
信思ふ〻ぶ。泡信ぶると云ハ。更有所
得の会不離。兎にも角にも有相執著の
会強きハ。唯凡夫の妄也。如此の理

より眼と目をて。一切苦系順逆栄辱名利。
拾て。夢中の妄想ありと知て。自己
の本源より向ひて。大疑団を起をべし。
真の道心と云ハ。志ハ真實と義と駿
通して。勇猛精進の心をおこりて。切
成心忍成心起る。爰中ハに一大事因
縁と守べし。一大事也。疎成心ハ備る大
事也。疎成心ハ知るべ。一大
事也。疎成心ハ。ユ夫
るをとりよ人ハ畫和の差別をく。ユ夫
の中より万事をつのして。勇猛の心離る

べし。若夢中より間断有人ハ疎成故
とゝろべし。暁の三時ハ入ともむ時也
あり。未此心起らざるして。我い眠より流
こ畫萬事にうゝでいるゝ人何といてか
佛果よゝてるべさや。古徳よ金身脱去の
人あり。在脱立亡の人あり。唯是信力
行力のあるべし所なるべし。今の人として
智有よいわるべゝ。偏信力ゝもこの
替成べし。真の修行とせん人ハ。一筋ゝ
勇猛の心と用て直よ出離生死の頻

力強發力事を放下して解脱の道
ゝもとゝしべし

可守捨分事

一法性城中に自己の寛敵競起て。抗圖
と頃ゝんと。何きの所ゝゝ来ル寛敵
ぞや。明よ知べし。分と行よ一会也。此会よ
ゝ起て。三悪四趣ゝゝ。分きて八万四
千の煩悩ゝる。皆是自己の寛敵ゝ。
此心と除滅せんゝ。捨分と守にゝくは
ゝ。分に添敵防ゝ。大事の敵と

滅とべき事。ひよ〳〵して行べく。沢。信力堅固と大将軍と定て。捨身の軍兵と先〳〵して。勇猛精進の武士と頭と定。幻化無常の剣と用て。自己の本源に向ひて。十二時中切に急に責給。動ハ色身則。煩悩の塠塢と〳〵り。此ハ悪業無明の主人と〳〵りて。己と滅ぶ〳〵。我が敵ハ此身ハ煩悩の袋〳〵。彼に迫時ハ悪道に入彼と共さぐる時ハ。安楽世界に入。偏此身心を愛とべ〳〵。古人云自己と見る事究竟也。と〳〵。去ハ此臭肉と乞せんに。出離する事有べ〳〵。智者ハ地獄の囚人の如と〳〵。未此意と得ざ〳〵ん人ハ。唯捨身代を守て。歯とくい合眼と急に守べ〳〵。或屍と成ら〳〵と用て生死と急に守べ〳〵。或屍と成て。棺の中に入〳〵。上乃薪の火ある〳〵と用べ〳〵。或火中に焼〳〵。火中此を守べ〳〵。或干騎万騎乃敵の中へ〳〵入て。大将乃頭を取べき〳〵と用て。捨身堅固の〳〵。沢

して。出離の道を修するも全く十べく次。怯弱の心中よりして寃敵未除。嗔恚ハ地獄の寃敵。貪欲ハ餓鬼の寃敵。愚癡ハ畜生の寃敵。人我ハ修羅の寃敵なり。乞。会執着ハ苦海の寃敵。喜悅心ハ輪廻の寃敵なり。惣じて一切の会皆是自己の寃敵なりて。自己より自己と責る敵なり。自己と守時ハ。自己より対する敵なり。縱一会起とゝ雖も。捨方の心堅固なりとゝ雖も。刹那より消滅次。されば会の起ハ病不嗣業也と。此起滅の心より向て切より怠に本源より責入る。箇心ハ何より物ぞ味方とも敵と成。汝ハ是何誰箇心の本源ぞ。什麼物ぞ。責ハ又何物ぞと。大疑心大勇猛心と以て。命を限より責入る。信力強盛せるゝ徳。情識の寃敵自抗より滅して。内外打成一斤とゝ。忽抗少して大休大歇の寶藏開て。煩悩ハ即菩提の眷属と成て。心王歓喜の殿より居住して。

我國安全成べし。是倫捨身成就の功徳あり

麓草分上終